

「クリスマスカード活動の報告と御礼」 2019年4月吉日

暖かい春が巡ってきました。「被災地の子どもたちへクリスマスカードを届けよう！」プロジェクト代表、中央大学名誉教授田中拓男です。皆様のクリスマスカードに対する御礼が遅れたことお許しください。今年度も世界の各地、日本の各地から心のこもった美しいクリスマスカードを送っていただき、心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

おかげさまで2018年度も台湾ユニット（約5、000通）や海外60余の日本人学校・日本語補習校などからの貴重なカードを含めて約25、000通のクリスマスカードを、被災地の小学校179校にお届けすることができました。岩手（49校）・宮城（57校）・福島（59校）の東北3県に加えて、熊本県、福岡県、岡山県、北海道の被災地の小学校、さらに昨年末大地震に見舞われたアンカレッジの日本語補習校にもお届けすることができました。

カード展示会用に毎年お願いしてきた、知事、大使、学長、社長、大僧正などの「VIPカード」については、2016年度で依頼作業を終了させていますが、2018年度も継続して次のような方々から貴重なご協力を得ました。黄川田衆議院議員、深田武蔵野市会議員、松井広島市長、田上長崎市長、川越市の川合市長および新保教育長（色紙）、中央大学福原学長、春秋育成会の二宮代表理事および瀬古専務などに、心からの感謝を申し上げます。さらに、三菱電機（株）の会長・社長・総務部長・東北支社長など要職7人の方々から、今年も継続して被災地の子供たちへ心のこもった励ましのメッセージが届き、展示会場でご披露させていただきました。毎年、8人それぞれに3通、ルビ付漢字を使いながら子供たちに優しく温かく語りかける尊い姿勢を拝見し、深く感動し胸を打たれています。年末のご多忙の中ご協力ご支援いただいたVIPのみなさまに心より感謝いたします。

今年度「福島市児童館コムコム」でのクリスマスカード展示会では、同時に「綾クレバーンピアノ演奏会 ウイーンからの風に乗って」を開催しました。児童館ホールほぼ満員の約300人が、ウイーンの優れたピアニスト綾クレバーンさんによるベートーベン「第九」（ピアノ演奏版）などの素晴らしい演奏に、深い感動感銘を受け、音楽の喜びに酔いしれていました。

3月には20日間、クリスマスカード活動の発祥の地、宮城県七ヶ浜町国際村ホールで、地元の人々の震災関連写真展とコラボして、クリスマスカード展示を行いました。私たちのクリスマスカード活動は、2011年12月この国際村ホールにて開催した「大震災犠牲者追悼の畠千春ピアノコンサート」から始まっており、ここはカード活動にとってまさに原点、故郷の地です。コンサート開催準備作業を行っていた夏の段階で、我々から共演予定の地元劇団の子供たち30名にクリスマスカードをお渡ししてほしい、という地元の方からのご要望があり、外部のみなさまにクリスマスカードの送付をお願いすることになりました。その結果、初年度約3万通のクリスマスカードが集まり、宮城県内の小学校にお届けしました。

その後、世界各地、日本各地の多くの人々のご協力ご支援を得て、カードは8年間でついに累計17万5千通にも達し、東北3県沿岸部の小学校、累計で約1200校に届けることができました。「思えば遠くへきたものだ、皆様の温かい愛情に助けられ、導かれて!」、第1回カード展示会を開催した国際村ホールの窓から、はるか眼下に広がる大津波の去った海を見渡しながら、これまでの活動の経過を振り返り、一人しみじみと深い想いに浸りました。

毎年多くの被災地の小学校関係者から、クリスマスカードを受け取った大きな喜びと深い感謝の想いが届けられています。今年も約50校の小学校からお礼状が届きました。被災地の子供たちに寄り添い励ます皆様のやさしく温かいお気持ちは、十分伝わっているようです。「カードを受け取った子どもたちは、今も心を寄せて励ましてくれる皆様の優しさ温かさに接して、みんな明るい笑顔を輝かせて喜んでいきます(カードを掲げた子供たちの写真添付)」。

「児童の笑顔は、被災地にとってかけがいのない宝物です」「毎年、クリスマスカードになにが書いてあるのか、楽しみにしています。ぼくは小学校を卒業します」「素敵なクリスマスカードを見ながら、楽しくクリスマスを過ごすことができました」。被災地からの嬉しいメッセージを読むと、良かったなー!心がほっこりしています。

多くのお礼状に共通しているのは、「8年目になっても私たちはまだ忘れられていない」という喜びの言葉でした。「世界各地の方々、日本各地の方々が、今も被災地のことを忘れずに、カードに励ましの温かい言葉を書いてくださっている。このメッセージに励まされ、地域のいっそうの復興とたくましい子供

達の育成教育の活動に向けて、とても大きな力と勇気と責任感が湧いてきます」という、先生方関係者の深い感謝の言葉が印象的でした。

被災地の小学校では、当時は幼くて震災前の故郷の美しい風景を知らず、個人的な大震災体験の実感もない児童が多くなっています。その結果、8年目ともなると、大震災大津波による罹災記憶が徐々に風化してきているのではないかと、という懸念が強くなっています。そんな時、「外部の方が遠くから寄り添ってクリスマスカードを児童に渡して励ましてくれることは、貴重な震災体験を風化させないための大きな力になります」と、感謝の言葉を伝えてきています。ちなみに、数年前から海外の日本人学校や日本語補習校から、「1年に1回のクリスマスカードを書く機会を生かして、大震災のことを忘れないように子供たちに話しています」と、ありがたいお便りをいただきました。被災者に寄り添うカード活動は、送る側でも受け取る側でも、その活動を通じて子供達に震災記憶を新たに風化を防ぐ貴重な役割を十分果たしています。

今春石巻市へ「色紙写真集」寺院奉納の旅の際には、昨年の市内カード展示会場で、染み込むような辛く悲しいお話をしみじみ聞かせていただいたご婦人に会ってきました。はじめは明るくにこにこ再会を喜び合っていたのが、「亡くなられた門脇地域近隣の多くの方々のことが、今も一時も忘れられず、残された自分はどのように生きていけば良いのでしょうか」と、目に涙をいっぱい溜めて問いかけられました。これからも長い年月にわたって、心の奥底にあの別離の悲しみと深い後悔の想いを宿しながら、それでもなお厳しい日々を孤独に耐えながら生き続けていかなければならない被災者の方々が、まだ非常に多く残されている。このことを思うと、カードを通じて被災者に親しく寄り添い語り合い励ましあう愛の大切さを痛感しました。

福島県では、原発周辺の帰還困難地域の一部で元住民の帰還事業が始まりました。また、大量の汚染土壌の処理作業によって、放射能汚染からの安全性の確保が広い範囲で進んでおり、県内各地で除染された汚染土を入れた黒いフレコンパックの袋が、原発周辺の間貯蔵地域に運び込まれています。山のように積まれたこの黒い袋を見るたびに、福島の人々がこれまでに原発事故で被っ

た堪え難い深い苦しみ悲しみをよく耐え忍んできたことの重大さが、我が身にひしひしと迫ってきます。

また、広い範囲にわたる福島製品の安全性の確保に向けて、極めて慎重に細心の努力が積み重ねられてきました。しかし、なお放射能汚染の風評被害が大きく、外部の人々から福島製品の安全性について正しく適切に理解されていないのではないかという悩みがなお残されています。今後もカードなどを通じて地元で懸命に頑張っている人々を励まし精一杯ご支援を続けたいと思います。

クリスマスカード活動は、これから9年目に入りますが、新しい動きが出てきました。福島の人々の間で「福島を元気にするプロジェクト」（今井代表）が立ち上げられ、カード活動に参加することになりました。初年度に、福島の人々から、熊本、岡山、北海道の被災地の児童たち、さらに、年の暮れに大きな地震に見舞われたアラスカのアンカレッジの児童たちにも、多数の励ましのカードが届けられました。アンカレッジの領事様から丁寧なお礼状をいただきました。これまでは、阪神淡路大震災被災者（神戸市）による恩返し東北支援がクリスマスカード活動の支柱（毎年約5000通のカード作成）になっていましたが、今度は福島の人々の心に火がついて燃え上がり、福島から他の被災地へ助け合い励まし合いの「絆」の輪がさらに大きく育ってきています。

現在福島で写真集『福島へ寄り添う愛 ；国境を越えるクリスマスカード活動の記録』（仮題）を作成しています。世界各地、日本各地から被災地に届けられたクリスマスカード全体の内容を詳しく紹介し、続いて世界へ向けて福島の復興状況や人々の感謝の気持ちを伝えながら、オリンピック見学の来日の際には競技の一部が開催される福島にも訪問されますように、福島の美しい自然の風景や名産品などを紹介しています。

2018年度から新年度にかけて我々のプロジェクトでは、二つの企画が進められています。一つは、大震災の犠牲者18,000人余の御霊を追悼するために、全宗派にわたる総本山大本山のご住職揮毫「色紙」77枚を収録した豪華な写真集「御霊 やすらかに！」（非売品）を作成し、被災地の300の寺院や大震災遺族の会などに奉納する旅を始めております。お正月など檀家の

方々が集まる機会にご遺族の皆様には是非ご紹介したいと、ご住職様は大変喜ばれていました。希望者には実費でお分けしようかと考えています。

もう一つは、私の新刊書『論語とディープアクティブ・ラーニング』（プロジェクトスタッフの田中絵里子の経営する株式会社 PLATINUM ZONE より刊行）の発刊と被災地の高校図書室などへの寄贈の企画です。今、日本の学校の教育手法は、グローバル時代の流れに対応するために、小学校から大学まで根本的な見直しが迫られておりますが、新しい教育手法の中核に置かれているのが学習者の主体的能動的な学習意欲に支えられた対話的、実践的なチーム学習法です。本書では、「論語」の約300の章句を使って、日本の新しい教育活動に孔子の伝統的な育成手法も導入し活かしていく可能性を具体的に検討しております。今春ようやく発売にこぎつけました。被災地で実際に大震災の恐怖を経験した若者たちが、こうした実践的な学習活動を通じて人間的にスケールの大きく、かつ実践的な課題処理能力に富んだ立派な社会リーダーに成長し、将来被災した故郷の復興発展という重責を十分果たしていくことを祈っています。皆様にも是非本の購入を通じて多大なご支援をお願いします。ご希望者は、Amazonでの購入、あるいは、直接筆者の田中拓男宛にお申し込みください。

間もなく平成が終わり、令和の時代に入ります。被災地を度々訪問され、被災者の前で膝を屈して暖かい言葉をかけられた平成の両陛下の貴い姿は、深く深く脳裏に焼き付いています。被災者一人として孤独の中に取り残されることのないようにと、被災者に親しく寄り添い、みなで励ましあい、助け合うことの大切さを教え導いてくださった美智子妃殿下のお言葉は、私たちのクリスマスカードの活動を支え導く強い力になりました。妃殿下の高く掲げられた慈愛の灯火に照らされ導かれて、私たちはさらに一層努力してクリスマスカードの活動を発展させていきたいと念願しています。皆様、今後ともよろしくご協力ご支援をお願いします。

最後になりましたが、皆様のますますのご健勝・ご発展をお祈りいたします。
感謝！

プロジェクト代表 田中 拓男、 スタッフ 田中 絵里子

〒343-0023 越谷市東越谷 6-22-19

(takuotanaka@gmail.com 048-962-3610)